

柳 宗悦の民芸論 (XXVI)

— 職人尽絵 —

八 田 善 穂

目 次

- (1) 職人尽図屏風 (川越市喜多院)
- (2) 『人倫訓蒙図彙』
- (3) 職人歌合
- (4) 洛中洛外図屏風
- (5) 『江戸職人図聚』

柳¹⁾の「工藝に関する文献」²⁾に、次のような一節がある。

「こゝに一つ面白いことは、職人の生活が絵画や和歌の題材に好んで選ばれたと云ふ事実である。絵の方で云へば有名な喜多院³⁾の「職人絵尽し」⁴⁾を始め、随分沢山描かれてゐる。中々美しいのがある。刊本では「人倫訓蒙図彙」⁵⁾の諸職人の図解のごときは出色のものであらう。師宣⁶⁾の筆になつた版画⁷⁾も絵として中々立派である。併し常に絵画の領域で題材となつてゐるのみならず、之が和歌や俳句に読まれたものが多量にある。「職人歌合」⁸⁾と題するもの、之に近似するもの幾種あるか、其の刊本の種類を集めたら相当の数にのぼるであらう。……是等の事実で見ると、日本人が工芸品を好んだ性質がよく分る。恐らく是程迄に多く工芸が詩歌や絵画の題材になつてゐる国は他にないで

1) 柳宗悦 (1889 (明治22) - 1961 (昭和36))。

2) 『学鏡』第42巻第3号 (丸善、昭和13年3月20日発行) 所載、筑摩書房版全集第9巻「工藝文化」所収。

3) 埼玉県川越市。

4) 職人尽図屏風。

5) 元禄3年 (1690) に刊行された商人や職人などの図説集。現在は平凡社刊東洋文庫519 (1990年刊) に収められている。

6) 菱川師宣 (1618 (元和4) - 94 (元禄7))。

7) 『和国諸職絵尽』(1685 (貞享2) 年刊、全4冊) 他。

8) 歌合の形式を借りた職人尽 (後述)。

あらう。」⁹⁾

本稿は、ここに挙げられた類の諸資料につき、その内容を概観しようとするものである。

(1) 職人尽図屏風 (川越市喜多院)

筆者は狩野吉信 (1552 - 1600) とされ、25種の職人が画かれている。吉田光邦『日本の職人』¹⁰⁾には各々についての解説がなされているので、以下それを記す。

鞞 (うつぼ) 師 (向臈師)

「卯建のある町家づくりの家で、屋根は板ブキの石置きである。ウツボとは矢をつめる道具で、竹でカゴをあみその上をウルシで飾り、毛皮や毛織物でくるんで美しく見せたりした。そこでこの図の一人は虎斑とらふのある皮で竹カゴを包んでいる。もちろんこれはほんとうの虎皮ではない。植皮師といって、虎皮を模造する職人が別にあつたのである。また一人は竹カゴの手入れ。壁にはいろいろな型のウツボがならんでいる。毛皮でつまれたのは猪逆煩いのさかずらのウツボという。そのほか虎皮のウツボ、緋の毛氈ひ もうせんでつまんだウツボ、また俵形に大きくふくらんだウツボがある。特にこの奇妙な形のウツボは土俵ウツボ (餓鬼腹ウツボ) といわれて、室町時代の末ごろの武士に好まれたものであつた。また天井から下っているものは障泥 (アオリ) というもので、馬の腹の両側にかけてアブミが馬の腹にすれることを防いだもので、ここに画かれた一組は革づくり、三組は毛皮製のものである。」¹¹⁾

縫取師

「二階建の町屋で二階が仕事場になっている。屋根は板ブキの石置き。卯建がやはりついている。ノレンがあつて三蓋松さんがいまつが染めぬかれているし、文様を画

9) 全集第9巻、pp.154 - 155。

10) 角川書店、昭和51年刊。

11) 『日本の職人』、p.255。

いた看板もすでに用いられている。

一階では主人がソロバンを前にし、また両皿天秤がみえる。ソロバンはふつう明との交通が盛んであった室町時代ごろに中国からもたらされたとされている。書物として紹介されたのは毛利重能の著『割算書』が最も早い。これは一六二二年の刊行。毛利重能は京都に住み「天下第一割算指南」の看板をかけて、ソロバンを教授したという。この新しい計算器はいちはやく利にさとい商人の間に伝播した。この図はごく初期のソロバン使用を示す図として名高いものである。

それに天秤がある。これは糸の取引に使ったのだろう。刺繍に使うのは上質の絹糸である。絹糸の売買は今でも目方で行なわれる。これも使用する糸の受け入れのために使われる天秤であろう。そして階上では棹張りした布地に刺繍している。職人は男一人、女二人。一人が金蒔絵した朱塗りの箱に入れて持っているのは、色糸を入れているのかと思われる。

この図ではもうはっきりと親方がいる。そしてその親方に使われている職人が男も女も年少者もいたらしい。親方はまた糸を買い入れては職人に縫わせていた。もちろん図にはないが、これに対応する間屋が必ずあったはずである。これになるともう家内手工業、そして親方と職人という今日とほとんど変らぬシステムとなっていることが看取できる。」¹²⁾

絞り師（纈纈師）

「多くの女が手がき、皮まき、疋田（鹿子）などの絞りをつくるのに忙しく働く。そして半裸の男は一方では泉水、手水、植込をもった美しい前栽の前で悠然と涼をとるといふ有様だ。これもまた幾人かの職人をもった親方なのである。」¹³⁾

12) 同書、pp.255 - 258。

13) 同書、p.258。

型置師

「型紙染に多忙の男、アイ瓶^{がめ}につけてアイ染をする女など、これもほとんど現在の小工場に変らない様子となっている。」¹⁴⁾

機織師^{はたおりし}

「絹機、花機の二種の織機をそなえ、糸をワクにまきとるもの、ワクの糸を^ひ杼のクダに巻くものなどの職人もいる。相当に大がかりな機屋であって、京都西陣の町家を想像させるほどだ。その情景は現在の西陣の小企業とすこしも変らない。」¹⁵⁾

桶師

「戸外で一人は竹のタガをけずり、他の一人はタガをはめこんでゆくという図柄。これは自分の家で仕事をする者ではない。彼らが働いているのは鼓筒師^{こどうし}の家の前であって、その家の看板には二箇の鼓筒が画いてあり、鼓皮を張ったもの二枚が乾燥中なのも見られる。この点から判断すると、このころにもう居職^{いじやく}と出職^{でじやく}の区別があったようだ。居職は町屋に住んで工房で仕事をつづけ、時には見世を出して売ることもする。出職は居職のように家の仕事場で製作するのでなく、大工や桶職のように出先のところで仕事する職人である。こうした二種の区別がもうこのころには生れていたらしい。そして彼らを用いる道具や技法もほぼこのころに定着されたといつてよい。」¹⁶⁾

仏師

「作事小屋のなかで職人四人が仁王をきざむ。工具はヤリカンナ、チョウナ、ノミ。この種の仏像は一木作りといわれ、頭や手足らを別々に製作したのち接合する。寄木仏とはちがった手法である。ヤリカンナは今日ふつうに用いられ

14) 同。

15) 同。

16) 同書、pp.258 - 262。

るカンナより以前に、平面や曲面をつくるために用いられた。現在でも伝統的な仏師や桶師はこれを使用する。」¹⁷⁾

傘師

「日傘、長柄の類の骨に紙を張る職人。横では妻と子がスリ鉢、スリコ木で糊をつくる。糊にはワラビ糊が用いられた。家族労働だった職人の典型的な姿である。」¹⁸⁾

矢師（矢細工師）

「瓦ぶきの立派な家での仕事。原料の竹の束を運ぶ者、竹をみがく者、羽を切りそろえる者、糸を巻く者、矢竹をため直す者などと、分業の工程がこまかに画かれる。ハサミの使用や、ニカワを煮る湯煎の方法が注意される。また侍烏帽子をつけるのがめだつ。」¹⁹⁾

甲冑師

「二階のある立派な瓦屋根の家。矢細工と同じように武家用の品物を作る職人たちが、わりにゆたかであったことをしめそうとするものらしい。かぶとの板をぬう者、胴丸の総角を結ぶ者、漆をねる少年、漆を塗る者、籠手や脛当をみがく者などがあり、やはりみな侍烏帽子をつけている。壁にはさまざまな武具がかかり、馬じるしといわれた金色のウチワや御幣もみられる。これは戦場での武士の個人的なシンボルであった。戦国時代、実力主義の世界となったときから盛んに使用されるようになったものである。」²⁰⁾

筆師

「筆づくりである。外でも毛皮を打つのは原料毛の手入れ。中では老職人が筆

17) 同書、pp.316 - 317。

18) 同書、p.317。

19) 同書、p.318。

20) 同書、pp.318 - 319。

をつくる。小刀、スキゲシ、糊用の盃などの道具は今日とほとんど変らない。」²¹⁾

経師

「一人は紙をたち、一人は糊をはく。現在でいえば製本師の仕事。一端には茶釜がみえ、茶の普及ぶりが想像される。ほかの図にも茶釜の画かれているものがあり、かなりひろく茶が飲用されていたことが考えられる。」²²⁾

組紐師（糸師）

「女性五人の仕事として画かれる。家は瓦ぶきの町家。糸を巻きとるのは整糸の工程。先が尖った棒を立てた台から糸をひいて組んでいるのは、丸紐である。二人が柱に結びつけた糸を組むのは、平打の紐をつくる仕事である。平打の紐は刀の柄糸や甲冑のおどし用の紐として用いられ、需要の多いものであった。」²³⁾

扇師

「瓦ぶきの町家風。のれんが注意される。軒先で男が打つのは扇の地紙。貼り合せたものを打ち固めるものか。これは現代ではみられない工程である。左の刷毛をもつ女は絵付けで、雲文を画いている。これに対する二人の女は、一人は折り、一人はそれをたたいて固め、しめ木にかける。これは現在でいえば扇の地紙関係の工程のみをしめしており、このほかに竹から扇骨をつくりあげる同じく分業の工程がもうひとつある。軒下には扇、うちわ、中啓などがみえる。」²⁴⁾

研ぎ師

「二人の研ぎ師が刀を研ぐ。家の外を共に刀箱をかつがせて若い武士が通るのは研ぎに出す風景であろうか。壁の向うから女が手を出して小刀を渡すの

21) 同書、pp.319 - 320。

22) 同書、p.320。

23) 同書、p.321。

24) 同。

は、刀研ぎの場には女性を入らせない禁忌でも存在したかとも思われる。壁には仕上がった長刀、十字槍、太刀などがある。」²⁵⁾

竹細工師（藁細工師）

「あばら屋の床に寝そべって外をながめている男が画かれる。竹かごなどがあり、カマ、小刀があるので竹細工師でもあろうか。ムシロが多くみえるが織り用の機械がない。内容の判定しにくいものである。」²⁶⁾

畳師

「桶師とともに一枚の画面に描かれる。石置き屋根に卯建がある。大型の刃物や畳ざしの台などは現在と同じ型である。ワラ束は畳の床に用い、巻いた畳表もみえる。」²⁷⁾

弓師

「白木の弓を小刀でけずる者がある。湯煎をしている器はニカワ用のものか。戸外で武士の従者らしい男が弓の強さを調べる。」²⁸⁾

珠数師

「珠数を染めぬいたのれんがかかる。奥では職人が一人、舞いぎりで珠に穿孔する。このドリル式の錐は、古くから手工業では重要な道具だった。一人は台から糸をひいてそれに珠を通して数珠に仕立てる。この方法は現在行われるものと同じである。なお舞いぎりは木工、金工（たとえば針づくり）にひろく利用され、発火用のきりとしても利用された。しかもこの形式が世界各地で多く用いられるのは、興味あることである。」²⁹⁾

25) 同書、pp.321 - 322。

26) 同書、p.322。

27) 同。

28) 同。

29) 同書、pp.322 - 324。

番匠（番匠師）

「大工のこと。作事小屋があり、チョウナ、カンナ、ヤリカンナ、墨壺、曲尺、木槌、ノコギリ、小刀、間竿などの工具がみられる。奥には板に画いた側面図があり、これからみるとこの大工は社寺を専門とする宮大工のようだ。小屋の外には棚に朱塗、黒塗の漆塗の膳椀があり、茶釜もみえる。漆塗を用いていることは、この大工はかなりに高級技術者でゆたかなことを意味する。」³⁰⁾

革師

「革細工の職人。足袋の底を裁断する者、袴を仕立てる者、かがり仕事をする者がいる。いずれも武家用のものである。また壁に長い円筒がかけられ、これに革が巻きつけてあって、女が糸を平行に巻きつける。これはこのあと染めて平行線の文様をつくるもので、糸引目革、または引目革といわれるもの。そのほか革羽織、手袋、袋物、貫などの製品も画かれる。」³¹⁾

鍛冶師

「野鍛冶すなわち農具鍛冶の仕事場。フィゴは箱型の水平式のもの。フィゴの横に火床があり、そこから煙突がのびる。関西地方で使われたシャベル型のふみスキ、カマ、ノコギリ、火ばしなどの製品や、注文品の図もみえる。鳥を飼う習慣のみられるのもおもしろい。」³²⁾

檜物師

「檜や杉のうすい板を熱湯につけてやわらかくし、まるくまげて桶型をつくったり、または薄板を組み合わせて卓、机をつくる仕事。中央の職人はヤリガンナでうすい平面をつくる。その右の者は曲げたあと、合せ目を二本の棒ではさんでとめる。これは職人たちの間ではハシといわれるもので、今日でも同じ

30) 同書、pp.324 - 325。

31) 同書、p.325。

32) 同。

ように使われている。石置き屋根には卯建がある。奥には原料の板が積みこまれる。」³³⁾

刀師

「刀鍛冶ではなく、刀装用の小道具の製作。今日でいうかざり職である。奥の二人は刀装品のひとつである目貫や、小柄用の柄金具の彫金細工にいそしむ。縁にいる職人は、つばの仕上げのための磨き作業である。フィゴはこれも水平式の箱フィゴ。各種のタガネが仕事台の上に置かれ、また加工すべき物をカスガイで台の上にとめる方法は今日でも行われる。」³⁴⁾

蒔絵師

「奥には金・銀蒔絵をほどこした銚子、瓶子、四脚卓、あぶみなどがならぶ。数人の男や少年たちの作業ぶりが画かれるが、仕事の内容はあまりはっきりしない。いずれも仕上げのための磨き段階のようにみえる。家が瓦ぶきであることが注意される。」³⁵⁾

(2) 『人倫訓蒙図彙』

全7巻から成り、その内容は以下の通りである。

巻一 公卿、武家、僧 (全109項目)

巻二 諸師諸芸 (内題「能芸部」) (全55項目)

巻三 農村、山村、漁村などの生業 (内題「作業部」) (全49項目)

巻四 諸職 (一) (内題「商人部」) (全59項目)

巻五 諸職 (二) (内題「細工人部」) (全49項目)

巻六 諸職 (三) (内題「職之部」) (全115項目)

巻七 諸職 (四) (内題なし、芸能関係) (全60項目)³⁶⁾

33) 同書、p.327。

34) 同。

35) 同。

36) 平凡社刊東洋文庫『人倫訓蒙図彙』、p.325。

このうちで「ものづくり」としての職人を挙げると次の通りである。

卷三 綿師、円座、莖打、土器師、瓦師、焼物師、火桶作、臥座打、石伐³⁷⁾

卷五 金彫師、絵師、筆師、珠摺、仏師、経師、表具師、櫛引、印判師、縫物師、扇折、蒔絵師、時計師、針摺、縫針師、額彫、木彫師、面打、青貝師、角細工、鋳師、象眼師、銀師、幾世留張、無節竹師、鈴張、茶入袋師、巾着師、紙入師、眉作、人形師、衣裳人形、張子師、雛師、楊子師、茶杵師、物指師、箸師、刷毛師、嘉留多師、簍師、胴人形師、団師、簇削、鐘木師、楊弓師、造花師、形彫、推朱彫³⁸⁾

卷六 大工、木挽、左官、屋襦茸、布瀑、柄卷師、天秤、鋳物師、鏡師、畳師、薄師、板木彫、籠師、表紙屋、秤師、編笠、檜物師、指物師、乗物師、珠数師、^{ふいご}鞆師、水囊師、墨師、印籠師、葛籠師、笠張、塗笠、榭師、紙子師、硯師、羽織師、翠簾師、塗物師、金粉師、銕泥師、水引師、合羽師、白粉師、臘燭掛、葉鑊師、鞠装束師、宮殿師、小刀磨、鍛冶、刀鍛冶、鍔鍛冶、挟毛貫、小刀挟刺刀、琴師、弓師、^{わく}仏具師、錫師、唐紙師、針鉄師、箒師、戸障子師、釜蓋師、竜骨車師、篋師、鋤鍬柄師、梭搔、車作、竈師、紺屋、沙室師、紅師、茶染師、紫師、練物張物師、臼師、糸車師、鎧、著込、絃、植虎革師、雪踏師、尻切師、革師、滑革師、桶結、足袋師、碓、継物師、鋳掛師、機織、鹿子結、木綿打、足打、ゑぼし師、はごいたや、ゑむま（絵馬）師、かづら師、位牌師、龜師³⁹⁾

(3) 職人歌合

歌合（うたあわせ）とは、左右二組に分かれた人々に詠ませた短歌を、左右

37) 同書、pp.86 - 132。

38) 同書、pp.167 - 194。

39) 同書、pp.195 - 246。

一首ずつ組み合わせ、判者が批評して優劣を決め、勝った数の多い組を勝ちとする遊びであり、主として平安時代に貴族の間で流行した。そして職人歌合は、この歌合の形式を借りた職人尽であり、建保2年(1214)成立といわれる『東北院職人歌合(五番本)』から始まり、『同十二番本』、弘長元年(1261)成立とされる『鶴岡放生会職人歌合』、明応3年(1494)の『三十二番職人歌合』、明応9年(1500)の『七十一番職人歌合』と続く。その後もこれらの影響の下、多くの職人尽歌合が作られた。これらに登場する職人は次のとおりである。

東北院五番本

医師、陰陽師、鍛冶、番匠、刀磨、鋳物師、巫女、博打、海人、賈人、経師(判者)⁴⁰⁾

同十二番本

医師、陰陽師、仏師、経師、鍛冶、番匠、刀磨、鋳物師、巫女、盲目、深草⁴¹⁾、壁塗、紺搔、筵打、塗師、檜物師、博打、船人、針磨、数珠引、桂女、大原人、商人、海人⁴²⁾

鶴岡放生会

楽人、舞人、宿曜師、算道、持経者、念仏者、遊女、白拍子、絵師、綾織、銅細工、蒔絵師、畳差、御簾編、鏡磨、筆生、相撲、博勞、猿楽、田楽、相人、持者、樵夫、漁夫、神主(判者)⁴³⁾

三十二番

千秋万歳法師、絵解、獅子舞、猿牽、うぐひす飼、鳥さし、大がひき、石切、桂の女、鬘捻^{かつらひねり}、算をき、こも僧、高野聖、巡礼、かね敲、胸たたき、へうほうゑ師、はり殿、渡もり、輿舁、農人、庭掃、材木売、竹売、結お

40) 至文堂『日本の美術 132 職人尽絵』昭和52年刊、p.73。

41) 土器売り。

42) 吉田光邦『日本の職人像』河原書店、昭和41年刊、pp.82 - 83。

43) 至文堂『日本の美術 132』、p.73。

けし、火鉢^{ちまき}うり、糖粽^{じおうせん}売、地黄煎^{じおうせん}うり、箕^{ちまき}つくり、しきみ売、菜^{ちまき}うり、鳥売、勸進聖（判者）⁴⁴⁾

七十一番

番匠、鍛冶、壁塗、檜皮茸、研、塗土、紺搔、機織、檜物師、車作、鍋売、酒作、あぶらうり、もちい（餅）うり、筆ゆひ、筵うち、炭やき、小原女、むま（馬）か（買）はふ、かは（皮）か（買）はふ、山人、浦人、木こり、草かり、えぼし折、扇うり、おびうり、志ろいものうり、蛤うり、いをうり、弓つくり、つるうり、ひきれ（挽入）うり、かはらけつくり、まむぢゅう売、ほうろみそ売、かみすき、さい（賽）すり、よろひざいく、ろくろし、ざうりつくり、硫黄掃売、傘張、あしだつくり、みすあみ、から紙し、一服一銭、煎し物売、琵琶法師、女盲、仏師、経師、蒔絵師、貝磨、絵師、冠師、沓造、鞠括、たち君、つじ君、銀ざいく、薄うち、針磨、念珠挽、紅粉解、鏡磨、医師、陰陽師、米売、豆売、いたか（居鷹）、ゑた、豆腐うり、索^{そうめん}麵売、塩うり、麴うり、玉磨、硯土、燈心うり、葱うり、すあひ（牙僧）⁴⁵⁾、蔵まはり、筏土、櫛挽、枕売、畳刺、瓦焼、笠縫、鞘巻うり、鞍細工、暮^{ほろ}露、通事、文者、弓取、白拍子、曲舞々、放下、鉢叩、でんがく、猿楽、ぬひ物志、組し、す（刷）りし、畳紙うり、葛籠造、皮籠造、矢細工、箆^{ひき}細工、蓑目くり、むかはき（行麿）造、金ほり、汞^{みづがね}ほり、はうちやう（包丁）し、てうさい、⁴⁶⁾ 白布売、直垂うり、苧売、綿うり、薫うり、葉うり、山伏、地しや（持者）、ねぎ（禰宜）、かんなぎ（巫覡）、競馬組、相撲取、禅宗、律宗、念仏宗、法華宗、連歌し、早歌うたひ、びくに（比丘尼）、にしう（尼衆）、山法師、なら法師、華嚴宗、俱舎しう、楽人、舞人、酢造、心^{ところてん}太^{ところてん}うり⁴⁷⁾

吉田光邦『日本の職人像』⁴⁸⁾ では、これらを次のように分類している。

44) 同。

45) 売買の仲買。

46) まんじゅうの一種。

47) 至文堂『日本の美術 132』、p.73。

武家、貴族関係

直垂、縫物、組紐、鞠と沓^{まり くつ}（けまり用）、烏帽子、鞍、弓、矢、刀かじ、刀とぎ、えびら、ひきめ（大型の矢）、弓弦、鞆巻、よろい、車、唐紙、すり師（紙に文様をする）、銀細工、蒔絵、貝すり（蒔絵用）、薄打、冠、むかばき、弓取（武士）、競馬組、連歌師、早歌うたい

衣関係

紺かき、綾織、機織、帯、白布、足駄、草履、櫛、枕、笠、傘、たとう、針、綿、苧

食関係

包丁、鍋、酢、ところてん、塩、こうじ、ねぎ、とうふ、蛤、魚、まんじゅう、ほうろみそ、茶、せんじもの、そうめん、酒、油、餅、てうさい（まんじゅうの一種）

住関係

番匠、壁塗、大鋸引、石切、檜皮ぶき、瓦、みす、たたみ、むしろ

日常生活関係

深草土器、火鉢、紙、檜物、箕、炭、硫黄付木、つづら、皮ご、ろくろ師（木工）、合子、さいころ、塗師、すずり、燈心、ほうき、鏡、鋳物、銅細工、白粉、紅粉、たきもの（香）、玉、数珠、念珠、扇、筆、経師

遊芸関係

琵琶法師、女盲、立君、辻君、いたか、楽人、舞人、すあい、白拍子、曲舞、田楽、猿楽

48) 注42) 参照。

宗教関係

念仏、法華、華嚴、俱舎、山法師、奈良法師、律、禪、山伏、びくに、地しゃ、にしう、ねぎ、かんなぎ、放下、鉢たたき、ぼろ

その他

医師、金ほり、汞ほり、すもう、陰陽師、通事、文者、山人、浦人、木こり、草かり、蔵まわり、えた、皮買、馬買、いかだ士⁴⁹⁾

(4) 洛中洛外図屏風

室町時代より、京都の内外の様子を一望のもとに描いた屏風が多く制作された。室町時代のものには旧町田家蔵本（国立歴史民俗博物館保管、1520年代後半）、上杉家蔵本（狩野永徳筆、1550～60年代初頭）などがある。

これらに細密に描き込まれた人物像の中には、職人歌合の三十二番本や七十一番本と共通するものが多い。至文堂『日本の美術 132 職人尽絵』⁵⁰⁾ 掲載の対照表によれば次のとおりである。

洛中洛外図（町田家本）と三十二番本

猿ひき、うぐひす飼、鳥さし、こも僧、高野聖、巡礼、かねたたき、胸たたき、はり殿、輿舁、農人、庭掃、材木売、竹売、鳥売

洛中洛外図（町田家本）と七十一番本

檜皮葺、紺搔、炭焼、小原女、いをうり、かはらけつくり、一服一銭、琵琶法師、たち君、つじ君、筏士、鉢たたき、山伏、禪宗、法華宗、びくに⁵¹⁾

(5) 『江戸職人図聚』

平成17年（2005）に93歳で亡くなった画家三谷一馬は、江戸風俗の資料画の著作を多く残し、それらは現在中公文庫に収められている。それらの標題は

49) 『日本の職人図』、pp.84 - 86。

50) 注40) 参照。

51) 至文堂『日本の美術 132』、p.38。

次の通りである。

『江戸吉原図聚』、『江戸商売図絵』、『彩色江戸物売図絵』、『江戸年中行事図聚』、『江戸職人図聚』、『江戸庶民風俗図絵』、『明治物売図聚』。これらにはそれぞれ出典が記されているので、資料的価値が高い。

以下においてはこの中から『江戸職人図聚』⁵²⁾について、項目と出典を列挙する。なお『江戸職人図聚』の内容は、衣、食、住、金、木、紙、器、文、武、遊、雑となっているが、本稿ではこのうち食、武、遊、雑の分を省略する。

衣

- 養蚕師 (絵本『絵本宝能纏』 年代不明 勝川春章画)
居坐機師 (絵本『十寸鏡』 年代不明 西川祐信画)
博多織師 (風俗本『風俗画報』55号 明治26年 尾形月耕画)
空引機師 (名所図会『都名所図会』 天明6年 竹原信繁画)
紺屋 (実用本『民家日用広益秘事大全』 嘉永4年 筆者不明)
型付け (絵巻物『職人尽絵詞』 文化3年 鋏形蕙斎画)⁵³⁾
幕染屋 (『風俗画報』240号 明治34年 尾形月耕画)
友禅染師 (絵本『土農工商』 享保頃 西川祐信画)
紋上絵師 (『職人尽絵詞』)
縫箔師 (雛形本『新板当風御ひいなかた』 天和4年 菱川師宣画)
紋染師 (錦絵『大日本物産図会』 明治10年 三代安藤広重画)
針妙 (合巻『宝船桂帆柱』 文政10年 歌川広重画)
仕立屋 (黄表紙『初売大福帳』 寛政10年 歌川豊国画)
蚊帳屋 (職人本『人倫訓蒙図彙』 元禄3年 蒔絵師源三郎画)
合羽屋 (『風俗画報』192号 明治33年 尾形月耕画)
組紐師 (絵本『百人女郎品定』 享保8年 西川祐信画)

52) 立風書房、1984年刊、中公文庫、2001年刊。

53) この絵巻物は1980年に岩崎美術社より『江戸職人づくし』として写真版が刊行されている(双書美術の泉48、朝倉治彦解説)。

洗濯屋（画本『画本時世粧』 享和2年 歌川豊国画）
 綿打職（『風俗画報』95号 明治28年 尾形月耕画）
 箒師（『人倫訓蒙図彙』）
 杼師（番付『新板諸職人絵番付』 年代不明 筆者不明）
 糸紡車師（同上）
 型彫師（『人倫訓蒙図彙』）
 足袋屋（『宝船桂帆柱』）
 草履屋（職人本『略画職人尽』 文政9年 岳亭定岡画）
 下駄屋（『宝船桂帆柱』）

住

人足（読本『白糸冊子』 文化7年 葛西北斎画）
 地形師（黄表師『延命長尺出世米饅頭』 天明頃 勝川春好画）
 大工（『土農工商』、合巻『土農工商梅咲分』 文政5年 勝川春好画）
 左官（川柳本『新撰画本柳樽』 天保14年 溪斎英泉画）
 漆喰師（曆本『天保新選永代雑書万曆大成』 天保頃 筆者不明）
 瓦師（名所図会『摂津名所図会』 寛政10年 丹羽桃溪画）
 瓦葺師（黄表紙『芝全交智恵之程』 天明7年 北尾政演画）
 檜皮葺師（読本『繪本金花談』 文化4年 速水春暁斎画）
 柿葺師（浮世草紙『世帯仏語渡世身持談義』 享保20年 筆者不明）
 茅葺師（『民家日用広益秘事大全』）
 石工（図会本『日本山海名産図会』 寛政11年 法橋関月画）
 建具師（『宝船桂帆柱』）
 指物師（職人本『今様職人尽歌合』 文政8年 北尾紹真画）
 箆笥師（『新板諸職人絵番付』）
 畳屋（『職人尽絵詞』）
 井戸堀（『民家日用広益秘事大全』）
 植木屋（『風俗画報』134号 明治30年 尾形月耕画）

竈師 (肉筆『職人づくし・左官』 文政頃 川原慶賀画)

金

鋳物師 (合巻『喜怒哀楽堪忍袋』 文政12年 歌川国安画)

針金師 (絵巻『先大津阿川村山砂鉄洗取之図』 江戸末期 筆者不明)

鍛冶師 (絵巻物『鍛冶屋』 年代不明 川原慶賀画)

鋸鍛冶師 (番付『諸職人絵番付』 年代不明 筆者不明)

鋏鍛冶師 (同上)

鋤鍛冶師 (浮世絵『東都地名の内・佃島』 年代不明 葛飾北斎画)

鋳師 (職人本『職人尽発句合』 寛政9年 梨本祐為画)

象嵌師 (『人倫訓蒙図彙』)

鏡師 (『宝船桂帆桂』)

箔打師 (『職人尽発句合』)

煙管師 (職人本『職人歌合之中』 文化4年 丹羽桃溪画)

針師 (専門本『日本縫針考』 明治5年 筆者不明)

毛抜師 (職人本『今様職人尽百人一首』 正徳 — 元文 近藤清春画)

木

面打師 (『今様職人尽歌合』)

仏師 (黄表紙『願解而下組哉拝寿仁王參』 寛政元年 北尾政美画)

船大工 (肉筆『職人づくし・船大工』 年代不明 川原慶賀画)

水車大工 (絵本『画本徒然草』 元文5年 西川祐信画)

檜物師 (『職人尽発句合』)

附木屋 (教訓本『道のてびき』 文政6年 丹羽桃溪画)

神輿師 (『職人尽絵詞』)

鞆師 (『風俗画報』196号 明治32年 尾形月耕画)

釜蓋師 (『諸職人絵番付』)

臼師 (『風俗画報』42号 明治25年 尾形月耕画)

- 桶師（絵巻物『桶屋』文政頃 川原慶賀画）
 纏師（『諸職人絵番付』）
 花車師（『風俗画報』134号 明治30年 尾形月耕画）
 乗物師（『人倫訓蒙図彙』）
 車師（『風俗画報』106号 明治29年 尾形月耕画）
 筏師（名所図会『大和名所図会』寛政3年 竹原信繁画）
 木挽師（絵巻物『木挽』文政頃 川原慶賀画）
 棒屋（『人倫訓蒙図彙』）
 算盤師（カルタ『職人尽絵合かるた』年代不明 筆者不明）
 榭師（『人倫訓蒙図彙』）
 茶筌師（『諸職人絵番付』）
 箸師（『人倫訓蒙図彙』）
 櫛師（『風俗画報』79号 明治27年 尾形月耕画）
 位牌師（『諸職人絵番付』）

紙

- 紙漉師（図説『越前紙漉図説』明治5年 小林忠蔵画）
 扇師（絵本『百人女郎品定』享保8年 西川祐信画）
 団扇師（合巻『出世奴小万伝』天保4年 歌川国直画）
 提灯師（合巻『左甚五郎腕雕一心命』文化7年 歌川国満画）
 傘師（絵本『北斎漫画』文化12年 葛飾北斎画）
 造花師（『宝船桂帆桂』）
 天徳寺屋（合巻『花見話虱盛衰記』寛政12年 歌川豊国画）
 紙衣師（図会本『日本山海名物図会』宝暦4年 長谷川光信画）
 経師（合巻『床飾錦額無垢』文政4年 歌川美丸画）
 表具師（合巻『琴声美人録』嘉永2年 二代歌川豊国画）

器

- 硝子師 (『北斎漫画』)
陶工師 (『日本山海名産図会』)
継物師 (『人倫訓蒙図彙』)
焼継師 (『略画職人尽』)
玉磨師 (実用本『万金産業袋』 享保17年 筆者不明)
角細工師 (『人倫訓蒙図彙』)
木地師 (絵巻『作業のあゆみ椀師作業工程絵図』 明治8年 佐藤五郎右衛門画)
菅笠師 (合巻『鹿島宮筒潮来』 文化12年 扇島徳秀画)
籠師 (『宝船桂帆桂』)
箒師 (『人倫訓蒙図彙』)
磴師 (職人本『俳諧職人尽』 天保13年 筆者不明)
白の目立師 (合巻『君子威徳富貴機』 寛政10年 知道画)

文

- 漆搔師 (教養本『教草』 明治9年 山寄董画)
塗師 (図彙本『頭書増補訓蒙図彙大成』 寛政元年 下河辺拾水子画)
蒔絵師 (『職人歌合之中』)
印籠師 (『人倫訓蒙図彙』)
紅師 (『職人歌合之中』)
白粉師 (『職人尽発句合』)
線香師 (肉筆絵本『長崎古今集覧名勝図会』 年代不明 筆者不明)
絵具師 (『日本山海名物図会』)
墨師 (同上)
硯師 (『今様職人尽歌合』)
筆師 (『職人尽発句合』)
刷毛師 (『風俗画報』158号 明治31年 尾形月耕画)

絵師（絵本『常濃山』寛政5年 竹原信繁画）

浮世絵師（合巻『恵方土産梅鉢植』文化5年 彩霞楼国丸画）

版木師（絵本『北斎画鑑』安政5年 葛飾北斎画）

時計師（『宝船桂帆桂』）

截金師（『新板諸職人絵番付』）